

2009年12月22日～30日

九州大学山岳会・山岳部 厳冬期劔岳登山報告

■はじめに

九州大学山岳会は、創部60周年記念事業として2010年秋にヒマラヤ登山を計画している。そのためのトレーニングの一環として、厳冬期、早月尾根からの劔岳登山がOBのメンバーを中心に計画された。その後、この計画に3名の現役部員が冬山合宿として参加することになった。計画の主目的は2つあり、第1はOB中心のヒマラヤ登山のためのトレーニングとさまざまな登山技術・装備・体力などの“点検”であった。第2は現役の北アルプスでの“冬山経験の蓄積”であった。総括で述べるように、いくつかの理由から劔岳登頂はできなかったが、上記2つの目的は、かなりの程度、達成されたと思う。

■参加メンバー

中溝幸夫（チーフリーダー・記録係）	OB 36年文	66歳
米澤弘夫（サブリーダー・装備係）	OB 39年理	64歳
青嶋憲一郎（食料係）	OB 39年工	65歳
渡邊文明	OB 31年法	73歳
友野真也*	OB 31年理	73歳
佐藤大介（食料・医療係）	大学院2年生	24歳
寺司周平（装備係・現役パーティリーダー・記録係）	学部3年生	21歳
甲斐誠二（遭難対策係）	学部2年生	20歳

（*友野氏は、緊急に家族の弔事があり入山できなかったものの、伊折ゲートまで車でサポートしていただいた。）

■ 行動記録

註：5日目（12月26日）までは、OB（中溝・米澤・青嶋）パーティの行動記録で、それ以降は現役（寺司・佐藤・甲斐）パーティも加わった九大隊の記録。12月25,26日は、現役パーティのみの行動記録も示す。

1日目（12月22日）曇り

7:00 博多駅 ⇒ 13:00 富山駅着 ⇒ 14:40 伊折冬季ゲート ⇒ 16:50 馬場島テント設営

富山駅で、富山在住OBの友野氏の出迎えを受ける。彼の車で伊折ゲートへ向かう。ゲートでは、十数名からなる報道陣のインタビューを受けた。（このインタビューの結果は、北日本新聞

12月23日の朝刊に「厳冬の劔岳へ第一陣 馬場島へ向かう九州大山岳会のパーティ」として写真入りで紹介された。) ゲートからは、除雪してある車道を馬場島まで歩いた。2時間10分で、馬場島到着。富山県警山岳警備隊の派出所に出向き、九大パーティの入山を知らせた。警備隊から各メンバーに個人用発信機を借用した。(発信機は、もし雪崩などで遺体が発見できなかったときのために富山県山岳警備隊が準備してくれた装備である。われわれの隊は、雪崩ビーコンを持参していたが、警備隊の発信機はさらにそれにプラスするものであった。) 派出所前の道路上、雪の上にテントを設営した。馬場島での積雪量は、1.6メートルであった。

2日目 (12月23日) 曇り

7:00 馬場島テント地 ⇒ 7:12 早月尾根取り付き ⇒ 12:02 松尾平 (奥の平) BC 設営 ⇒ 13:30 馬場島テント帰着

松尾平にBCを建設するために食料・装備をもって馬場島(高度760m)を出発した。立山川の右岸沿いの車道を約200メートルほど歩くと、小窓尾根・赤谷尾根に入るパーティが辿る白萩川沿いのルートへの分岐点がある。その方向に小さなシュプールがつけてあった。そこを過ぎてさらに50メートルほど歩くと、早月尾根への取り付きに到着。ここでワカンを着けた。早月尾根取り付きから急な尾根道のラッセルが始まった。急な尾根を過ぎると、平坦な林間にルートを取り、ところどころに赤旗の標識を見つけることができた。おそらく昨年以前のパーティのものだ。この付近が松尾平である。松尾平でも膝上、あるいは腰までのラッセルがあった。松尾平の奥から右の斜面にルートを取り、50メートルほどを登って再び尾根筋に出た。さらに尾根を100メートルほど登ると、ルートは右方向に屈曲し、再び平坦なところに出た。ここは、いわゆる“奥の平”と呼ばれているところだ。奥の平の中ほど立山川を見下ろす場所にBC用の2人用テントを設営した。28日に入山する渡邊氏の食料などをテント内にデポした後、馬場島のテントに戻った。馬場島では建物の駐車スペースにテントを移動した。

3日目 (12月24日) 曇り

7:33 馬場島発 ⇒ 9:50 松尾平 (奥の平) BC 着 テント設営 ⇒ 10:50 BC 発 ⇒ 14:10 1330m 地点 食料装備のデポ ⇒ 15:05 BC 着

馬場島のテントを撤収した後、奥の平までは昨日のシュプールを辿った。奥の平のBCのテントから50メートルほど上にわれわれのテントを設営した後、食料・ザイルなどの装備をもって、早月尾根上部のラッセルに出かけた。高度計で1330メートルの尾根筋にテントが張れるスペースがあり、そこに食料・装備をデポし、奥の平のテントに戻った。

4日目 (12月25日) 晴れ、尾根上部は曇り

7:30 BC 発 ⇒ 8:43 デポ地 (1330m) 着 ⇒ 9:15 デポ地 (1330m) 発 ⇒ 13:17 1950 m 地点にて食料装備のデポ ⇒ 16:10 早月小屋着 2200m AC 建設

奥の平のテントを撤収し、早月尾根のできるだけ上部、可能ならば 2200 メートルの早月小屋付近に AC を建設することが今日の目標であった。奥の平から 5 分程度で再び尾根筋に出た。1330 メートルのデポ地の少し手前で、富山県警山岳警備隊の 6 名のパーティが追いついてきた。警備隊のリーダーから「自分たちは登山者のためにルートを作るつもりはない。そのことをよく知っていてほしい。」旨のことを言われた。これから 2200 メートル早月小屋までのラッセルのことを指しているのだ。この時期、3 名の山岳警備隊が早月小屋に居住して、劔岳西面での遭難事故に備えているのだ。1330 メートルのデポ地で昨日デポした食料・装備を回収し、ここからはフルボッカで登った。早月尾根の 1551 メートルのピークまでは、ぐいぐい高度を稼ぐ。そこを過ぎると、1920 メートルのピークまで少しだけ傾斜がゆるくなった。ピークを過ぎたところで、再度、食料・装備の一部をデポし、2200 メートルの AC 地点を目指した。早月小屋の手前にある 2224 メートルのピークが近くに見えるけど、なかなかそこに辿りつかない。3 名とも体力を消耗し、かなりばて気味だった。2224 メートルピークへの登りで早月小屋が見えた。ここから最後の斜面を登りきると、やっと小屋の全体が見え、そこからは下りだった。午後 4 時を過ぎて小屋に着き、風を避けて小屋横の平坦地に AC を建設した。早月小屋の山岳警備隊に九大パーティが AC を建設したこと、1330 メートルからここまでラッセルをしてくれたことのお礼を伝えた。これで劔の頂上アタックの体制が整った。

【現役パーティ】

4:23 富山駅着⇒6:00 友野さんと合流⇒7:30 伊折 0745⇒9:40 馬場島派出所 10:20 1300 松尾平 ⇒14:30 1300m TS (偵察に出発)⇒15:30 1300m TS (偵察から帰幕)

富山駅からかねてより連絡をとっていた友野先輩に、自動車伊折集落まで送っていただく。路面が凍結していたため、途中で自動車での乗り入れを断念、ゲートまで 40 分ほど歩くことになる。ゲートで小休止のとき、ボックスカーに乗ったご夫妻に遭遇する。乗っていきなさい、その優しい言葉に甘えて馬場島まで残り 1 キロほどの地点まで自動車に乗せていただく。(聞いた話では、先行の OB 先輩方はその申し入れを“トレーニングだから”と遠慮したということ。怠惰な後輩どもですみません。) 馬場島で警備隊から発信器を受け取り、いざ入山。明瞭なシュプールをたどっていくと、すぐに早月尾根取り付きに。急登が始まるもシュプールのおかげで対した苦勞もせずぐいぐい登っていく。

松尾平の平坦なルートの途中でワカン装着する。寺司と甲斐にとっては、初めてのワカンである。シュプールをひたすらたどっていくと奥の平の BC テントを発見。そこからすぐ松尾平を抜けて、急登を登りはじめる。1 時間半後、1350M ピークの少し手前に整地されたような跡があ

るのを発見し、ここを幕営地に決める。佐藤と寺司の2名で偵察に行ったのち、テントを設営した。

5日目 (12月26日) 曇り・降雪

9:12 デポ回収へ AC 発 ⇒ 9:55 デポ地(1950 m) 着 ⇒ 10:20 デポ地(1950 m) 発 ⇒ 11:50 AC 着 ⇒ 12:50 現役パーティ AC 着

天気がよくないので、昨日のデポを AC に回収した。11時に現役パーティと交信がとれ、以後、1時間ごとに交信を続けた。12時50分現役パーティ3名が AC に到着した。

【現役パーティ】

4:00 起床⇒6:30 出発⇒8:00 1600m ピーク⇒12:50 2200m・早月小屋 AC

4時起床。6時出発の筈が思いのほか手間取り6時半出発。本日も我々の歩みの先にはシュプールのびる。地形を読みつつ、ひたすらたどる。昨夜からの雪で多少埋もれているところがあり、甲斐と寺司は“ラッセルデビュー”。1900メートルのピークで右に折れると、平坦な尾根が続く。読図も何もほっぽり出して、感覚で小屋が近い、小屋が近いと思い込んでいるとそこから先が(精神的に)長かった。最後の急登を登り終えた先の小高い丘の上に QUAC の赤旗がはためいていた。旗の隣にたつと、早月小屋と AC のテントがみえた。テントの中では OB 先輩方が温かいブレンダー入りの紅茶を用意して待っていてくれた。

6日目 (12月27日) 快晴

7:13 AC (2200m) 発 ⇒ 8:50 2450m 地点⇒13:30 シシ頭 (約 2850m) 着 引き返す
16:15 AC 着

昨日の天気図からはまったく予測できないような快晴になったので、早月尾根上部のルート作を行った。もし状況がゆるせば、頂上アタックを試みることにした。2200メートルからの尾根上のルートは、ところによっては胸までのラッセルだった。現役と OB とが交代で、ラッセルを行った。30分程度、登った尾根上でクラストした雪面がでてきたので、エゾマツの裾にワカンでデポしアイゼンを装着した。2450メートルのピークには数張りのテントが張れるスペースがあった。2600メートルのピークを過ぎ、烏帽子岩 (ca. 2700m) の急斜面 (約 30メートル) を登ることになった。尾根の平坦部には池ノ谷側に小さな雪庇が出ており、ところどころで深い雪穴に落ち込むこともあった。烏帽子岩を過ぎたところで、佐藤の調子が悪く「下山したい」という本人からの申し出があったので、パーティ全体が戻るまでその場に待機するように指示した。その後、甲斐も足の疲労でダウンした。米澤が2人(佐藤・甲斐)の下山をサポートすることになり、シシ頭の登り手前で登行をやめた。残った3名(青嶋・寺司・中溝)で、雪の深いシシ頭

を登ることになり、池ノ谷側のトラバースで再びザイルをつけた。しかし、ラッセルが深くカニのハサミまではかなりの時間を要するとみて、ここで登行をやめ、全員下山を決定した。下山では、ところどころで、疲労した現役3名の確保のためにザイルを使用しながら下山した。午後4時過ぎにACに戻った。

7日目（12月28日）風雪

12:05 ラッセル訓練出発 ⇒ 14:00 ラッセル・雪洞堀り訓練の終了

朝から風雪が強く、尾根上部に行けそうにないので、現役のラッセル訓練、雪洞堀りの練習を行った。2時間程度であったが、密度の濃い、雪山のトレーニングを行うことができた。午後、山岳警備隊からの連絡で、予定どおり渡邊が馬場島に入山したことを知った。

警備隊の電話で、渡邊と話すことができ、渡邊は計画を変更して下山することになった。警備隊はできるだけ単独行をしないように指導しており、渡邊がBCに入るためにはACから渡邊のサポートに2名が下山する必要がある。明日、青嶋が下山するので、そのサポートに米澤・寺司を予定し、その2人が同時に渡邊のサポートを行うということで警備隊の了承を得た。しかし、その後、渡邊は自分の行動のために、2名のメンバーを割くことを考慮して、予定変更し、馬場島から富山に下山したいという決定を伝えてきた。その結果、明日のACからの2人のサポートは、青嶋の下山のサポートだけということになった。（実際には、この日、渡邊は馬場島にてビバークした。）

8日目（12月29日）快晴

6:45 青嶋下山 AC発（米澤・寺司サポート）⇒ 6:58 米澤、寺司ACに戻る ⇒ 7:38 アタックに出発 ⇒ 11:35 シシ頭ピーク（2900m）から引き返す ⇒ 14:20 AC着

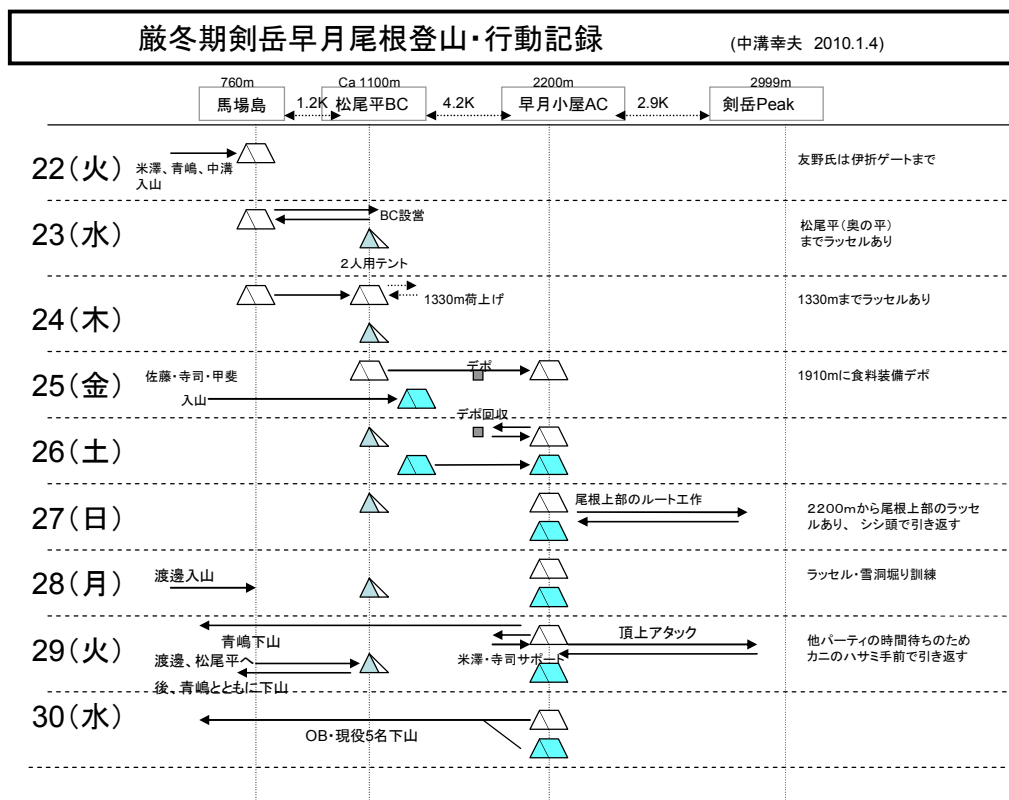
27日と同様に、昨日の天気図からは予測できないような快晴になった。青嶋は、予定どおり下山を開始した。米澤・寺司が青嶋のサポートのために適当なところまで、尾根を下ることにした。サポートを終えて米澤・寺司がACに戻った後、本隊5名で頂上アタックに出発した。すでに数パーティが頂上アタックに出発した後なので、ルート上のラッセルはほとんどなく、2600メートルピークまでは快調に登る。しかし、烏帽子岩の登りとシシ頭の登りで、先行パーティの登攀の待ち時間が多くなり、結局、カニのハサミの手前、シシ頭のピークの下りアップザイレンの箇所での下山を決定した。主な理由は、このまま先行パーティの後を追って頂上まで登るとすると、今日中の下山が難しくなる可能性があり、また天候が丸一日もつかどうかかわからないという判断であった。（結果的には、剣の山頂まで登ったパーティは、われわれの帰幕時刻よりも2時間半ほど遅れてACに戻ってきた。話を聴くと、シシ頭から上部は、ほとんど技術的な問題はなかったということであった。われわれの時間判断は、間違っていた。）

渡邊は、馬場島から松尾平に登り、そこで下山してきた青嶋に会い、そこからは二人で馬場島に下山した。

9日目 (12月30日) 曇り

7:53 下山開始 AC 発 ⇒ 11:30 松尾平 (奥の平) BC 着 ⇒ 12:20 馬場島着 ⇒ 13:00 馬場島発 ⇒ 14:45 伊折ゲート着 ⇒ 15:55 伊折部落発 ⇒ 16:45 上市発 (富山地方鉄道) ⇒ 17:00 富山駅着

昨日のアタックで全員かなり疲労しており、また本計画の目的のほとんどを達成できたし、山岳警備隊の天気情報では明日から天気が崩れて冬型になるということだったので、松尾平まで下山することに決定した。(実際にこの日の夕方から北陸地方は大雪警報が出されており、この下山の判断は正しかった。) AC を撤収して下山を開始した。約3時間で、松尾平着。ここで現役から、今日中に富山まで下りたいという申し出があったので、富山まで下りることにした。AC から4時間で馬場島着。山岳警備隊派出所に無事下山を報告し、発信機を返却した。馬場島から伊折ゲートまでは2時間弱で着いた。ゲートでタクシーの到着を待っているとき、早月小屋のオーナーである佐伯さんがライトバンで通りかかり、われわれを伊折部落まで運んでくれた。16時に伊折に迎えのジャンボ・タクシーが来て、5名のメンバーとボッカを載せ、25分後には上市の富山地铁の駅まで運んでくれた。駅でパーティを解散した。



■ 総括と反省

今回の登山目的は、以下の項目に示すように OB と現役でそれぞれ異なっていた。これらの目的は、全体としておおむね達成できたと言える。しかし、部分的には問題がなかったわけではない。以下、それぞれの項目がどの程度、達成できたかを評価したい。

OB パーティの目的

- 1) ヒマラヤ登山のためのチームワーク・リーダーシップ・メンバーシップの点検
- 2) ヒマラヤ登山のための個人装備の点検
- 3) 雪山でのザイルワークや岩場、急斜面におけるザイル・フィックス工作の練習
- 4) ポッカカ（20～25kg の荷を担いで、雪の急斜面を歩く体力）の点検
- 5) 雪山“感覚”の回復（ピッケルワーク、アイゼンの着脱、テント設営・撤収、生活技術など）

現役パーティの目的

- 1) 冬山基礎技術の訓練
 - ・ テント設営場所の選定
 - ・ テント設営および撤収
 - ・ 冬山でのテント生活
 - ・ アイゼン、ワカンをつけたラッセル・歩行
 - ・ ピッケルワーク
 - ・ 雪のある岩場、岩稜、雪稜でのザイルワーク、フィックス工作
 - ・ 強風（地吹雪）への対応
 - ・ 冬山登山の体力の点検

◆ OB パーティの目的は、どの程度達成されたか

ヒマラヤ登山のためのチームワーク・リーダーシップ・メンバーシップについては、登山のほぼ全期間、参加した 3 名の OB メンバーについては、ひじょうに良好であった。理想的にはヒマラヤ登山の参加予定メンバーが全員、今回の登山に参加するのが望ましかった。しかし、海外在住などさまざまな事情から参加できなかったメンバーもいたし、また出発間際になって急遽、参加できなくなったメンバーもいたことはひじょうに残念であった。その結果、後発の OB が単独行動をとらざるをえない状況が出てきて、そのことが富山県警山岳警備隊に一定程度の心配をかけることになったことも否定できない。（九大隊は、冬山で危険な単独行動を許すのかという“お小言”も言われた。）

冬期登山に不可欠な個人装備の点検は、十分にできた。それぞれのメンバーは、同一の個人装

備を持参したわけではなかったが、各自の個人装備で、ヒマラヤ登山を想定したときに満足できる装備もあったし、不満足な装備もあり、それらを“実際に”冬の剣岳で点検できたことは大きな収穫であった。それら点検項目の中には、以下の装備が含まれていた。(登山靴、寝袋、衣類(下着・上着)、防寒着、エアマット、手袋、オーバーミトン、アイゼン、ワカン、ピッケル、ストックなどである。)

雪山でのザイルワークや岩場、急斜面におけるザイル・フィックス工作の練習も、完璧とは言えないにしても、早月尾根上部(烏帽子岩からシシ頭を経て、カニのハサミに至るまでの2600～2900メートル区間)で一定程度、練習できた。例えば、烏帽子岩やシシ頭への雪と岩まじりの急な斜面、池ノ谷側の急な雪面でのトラバースなどでザイルを使用した。もっとも3名のOBメンバーにとってはこの区間の難易度ではザイルはほぼ不要であり、ザイルはもっぱら現役部員のために使用した。そのことがOBメンバーにとっては、ザイル操作のある程度の練習になったとも言える。

ボッカカ(20～25kgの荷を担いで、雪の急斜面を歩く体力)の点検もじゅうぶんできた。入山時、ザックの重量は、(3名のOB)個々人で少しずつ異なっていたが、25キロから30キロの範囲であった。伊折ゲートから馬場島まではフルボッカで入山した(3時間弱行程)。また、早月尾根取り付きから松尾平(1047m)まで、さらにその上部1330メートルまでのルートはラッセルがなかったので、荷(デポ用の食料・装備)をかついでのラッセル練習もできた(約4時間行程)。また奥の平(約1200m)から早月小屋のある2200メートルのACまではほぼフルボッカしてテント移動した(約8時間行程、この区間は富山県警の山岳警備隊のラッセルがあった)。さらにACからシシ頭付近(2850m)までのルートもノーラッセルだったので、九大パーティがラッセルしてルートを確認した。以上のような行動から、各メンバーは自己の体力の限界についてじゅうぶん知ることができ、ヒマラヤ登山を想定したとき、それは大きな収穫だった。

雪山“感覚”(ピッケルワーク、アイゼンの着脱、テント設営・撤収、生活技術など)についても、入山して目を重ねるにつれて山岳部時代の感覚が回復した。雪の中のテント生活に慣れることは、ヒマラヤ登山を想定した場合、ひじょうに重要だと考える。その点で、雪山感覚の回復は一定の成果である。

◆ 現役パーティの目的は、どの程度達成されたか

現役パーティの主目的は、冬山基礎技術の訓練であった。とりわけ、<アイゼン、ワカンをつけたラッセル・歩行><ピッケルワーク><雪の急斜面、細い岩稜、雪稜でのザイルワーク、フィックス工作>が重点項目であった。現役パーティは、2200メートルまではほとんどラッセルはなかった。しかし、2200メートルからの尾根の上部については、ワカンを装着して、急斜面における胸までのラッセルを訓練することができた(12月27日)。ハンディなスコップをもつ

たラッセルも経験した。深い雪の場合、スコップを用いたラッセルが特に有効であるという認識も新たに得ることができた。また 12 月 28 日は天候はガスで、地吹雪だったので、AC 周辺の安全な急斜面でラッセル訓練や雪壁に近い急傾斜での登攀を練習することができた。また雪洞掘りの練習も行った。これらの訓練は、OB が直接、手本を見せ、現役はそれを真似することによってコツをつかむというやり方を行った。

ピッケルワークとアイゼン歩行については、2600 メートルからの尾根上部で二日にわたって延 10 時間程度、経験することができた。また、雪稜、岩稜でのザイルワークもある程度、経験できたと思う。

現役の重要な反省点としては、上に述べた活動において“迅速さ”に欠けているということだ。とりわけどこでザイルを使うかの判断やザイルの使い方、ザイルの準備作業などにおいて、迅速さに欠けていたと思う。雪山経験の不足も一つの原因であろうが、今後は常に“迅速な行動”を心がける必要がある。

雪山におけるあらゆる行動の迅速さは、テント生活でも例外ではない。起床から食事の準備、テント外でアイゼンやワカンを装着し、登行の準備をするなど、すべての面で迅速さが必要である。

雪山での体力について、現役は体力（いわゆるスタミナ）がまったく不足していたと言える。2200 メートルからの尾根上部のルート工作は、われわれが最初のパーティだったのでほとんどすべての場所でラッセルがあり、それが体力の消耗を促したことは否めない。12 月 27 日、2800 メートルのシン頭付近で、現役 3 名は、それ以上の登行がほとんど不能になるほど、スタミナがなくなっていた（リーダーの判断による）。この問題は、今後、冬山登山を目指す上で、ひじょうにシリアスな問題である。今後は、地上での体力強化のためのトレーニングが欠かせないし、それなくしては今後の北アルプスでの冬山合宿はありえないとさえ言えるかもしれない。（以上、中溝）

■ 係りの反省

◆ 装備係反省（OB パーティ） ----- 米澤 弘夫（39 理）

今回の山行はOBパーティと現役パーティとが別々のテントに宿泊したため、現役パーティの様子については分からない。ここで取り上げるのは、OBパーティについてのみである。

装備係として考慮しなければならない点は、二つある。

1. 行動計画、メンバーの力量にあわせて持参する装備の種類と量を決定する事。

持参する装備の量が多いほど、快適な生活が出来るが、ボッカ力には限界があり、行動性との整合を取らなければならない。また、平均年齢 65 歳となるOBパーティのメンバー構成を考えると、軽量化は大きな問題となる。持参した装備は計画書（冬山準備号）を参照されたい。

今回持参した装備の中で、フィックスザイルと二人用テントは使用しなかった。しかし、これは、行動計画、行動目的に沿った物であり、不必要な装備を持参したとは言えない。燃料として500g入りガス・カートリッジを1テント当たり、1日半個と見積もった。ガスランタン用にも使用したが、食糧計画で消費燃料の少ない献立を立てたために、十分な量であった。また、ガスバーナーを2個ずつ持参したものの、実際には1個しか使用しなかった(2個同時に使用すると、ひっくり返す恐れがあったため)。しかし、バーナーが故障すると致命的な事態になるので、やはり予備を兼ねて2個持参すべきであろう。ガスランタンの使用は、明度、暖房の点から有効であると思った。調理具として、テフロン加工のフライパンがあれば便利に使えるだろう。

テントを固定する竹ペグは頑丈に作ってあったが、重すぎる。もっと軽くするべきだった。また、予備を入れ、1テント当たり、10本あれば十分だろう。赤旗の作成を現役に依頼したが、作りが雑すぎた。そのために、運搬中、破損が目立った。OBパーティは、スコップを1個持参したが、ラッセルにおけるスコップの有効性を認識したので、予備を考えるとパーティとして2個あった方が良かったかも知れない。その他、装備計画に大きな問題点は無かったと思っている。

2. 絶対必要な装備を確実に持参する事。

グラウンドシートとタワシを忘れたのは迂闊であった。最後のチェックが甘かったのは反省している。パッキングの時に、一つ一つ装備表と照らし合わさなくてはならないし、また、追加された装備をきちんと装備表に記入、訂正しておかなければならない。

3. 個人装備に関しては、気象条件が良かったために、厳格な性能が試される場面は出てこなかった。オーバー手袋は、インナーの濡れを防ぐという意味から、早期に使用した方が良いと思う。マットは、かさばるものの、全身用の十分な厚さのある物でなければならぬと痛感した。薄いマットでは、テントの床が大きく沈下し、不愉快な状態に陥ってしまう。

4. その他

小キジ等の場合に、膝下まで入るナイロン製の物入れを靴の代わりに使用したが、ポリ袋の様に滑ることはなく、快適であった。テントシューズの代用として十分に使える。また、衣類に貼って使える“使い捨てカイロ”を持参した。寝る前に貼って寝ると一晩中、背中が温かく、快適であった。最近、足に貼るミニカイロも販売されているので、今後はこれも利用できると思う。

見方が甘いのだろうが、今回の山行では装備に関して大きな不備は感じなかった。もっと厳しい気候条件の下では、色々な問題点が出てくるのだろう。ヒマラヤ登山のための点検という意味では、一日、猛風雪に遭った方が良かったのかも知れない。

◆装備係反省(現役パーティ) ----- 寺司 周平 (3年 理)

今回の合宿では、共同装備に関してはほとんど問題がなかった。憂慮していた竹ペグ(20×5cm)は通常のペグの使い方でも何ら問題なく利いていた。固定用ザイルの重さも体力で十分にカ

バーできるところであった。

次回の冬山に活かせることがあったとすれば、履いて雪の中に出ることの出来るテントシューズを持って行きさえすれば、もっと容易にキジ打ちに行けたであろうということである。

◆食料係反省（OBパーティ）----- OB食料係 青嶋憲一郎（39年工）

2009年早月尾根の冬山合宿の食料係を担当するにあたり、留意した点は軽量化、コンパクト、カロリーの3点であった。これを元に第1次案を作った。この時点で、朝食はおおむね良いと判断され、昼食で、クラッカー、ビスケットの類は喉通りが悪いと言う意見があった。夕食は野菜や肉、無洗米などを計画したので、軽量化についてもっと考えるようにとの意見が多かった。これらを勘案して、最終計画を作った。レーションの基本形は以下の通りである。

	朝	食	昼	食	夕	食
1 日 目	屋台棒ラーメン	298.0kcal	紅茶	115.0 kcal	α米（白飯）	366.0 kcal
	スライスチーズ	33.8	砂糖	40.0	クリームシチュー	158.0
	ブイヨン	4.0	詰合せ	540.0		
	切餅	115.0	チョコレート	56.5		
		450.8 kcal		646.5 kcal		524.0 kcal
2 日 目	きつねうどん	342.0	コーヒー	40.0	ソース焼きそば	510.0
	切餅	115.0	砂糖	40.0	粒コーン	61.0
			デニッシュパン	396.0		
			甘納豆	47.0		
		457.0		523.0		571.0
3 日 目	ポタージュスープ	72.0	紅茶	10.0	マーボー春雨	464.0
	カロリーメイト	400.0	砂糖	40.0	春雨	114.0
			詰合せ	540.0		
		472.0		590.0		578.0

(1 レーションを3人3日分として設定した)

これにより重量は1レーション（3人3日分）あたり3,506.5gとかなり軽量化されたが、その代わりにカロリーが上表に示すように、1600kcal前後と少なくなった。雪山では5,000kcal

必要といわれることから考えると、かなり少なくなった。このためテント内で、紅茶、コーヒーを良く飲むようになり、砂糖や紅茶が不足した。しかしそのことを考慮したとしても、あまり空腹感を覚えなかったのは、やはり歳のせいであろうか。そんなに大量には食べられない。

もうひとつの課題である食べやすさおよび味についてはかなり不評で、今後課題を残した。あげられる点は、

1. α 米は食感が悪いので、1人前を食べられない人が多く、ふりかけやなめ味噌のような補助食品を検討する必要がある。
2. 味噌汁が飲みたくなる人もあり、インスタント味噌汁などがあると α 米も食べやすくなるかもしれない。
3. 全体的に満腹感不足、カロリー不足で、疲労が増す傾向にあったのは問題である。少々重量が増えても野菜、肉をボッカしてあげる必要があるだろう。肉の代わりにハム類でもいいのではないか。
4. 現役のようにペミカンを作って、肉や野菜類を摂取することも考えたが、聞くところによるとラードの塊のように思えて、年寄りには合わないだろうと判断し、今回は採用しなかったが、今後ペミカンの作成方法も含めて、検討してみる必要があるだろう。
5. 昼食の詰合せも不評でもっとやわらかく、噛み砕きやすいものが望まれた。ビスケット類は口の中でばさばさになり、嚥下しにくい面がある。量的には少し少なかったかとも思われる。各人の嗜好もあろうが、候補に上がったのは、どら焼き、ゼリー、カステラなどの糖分が多くやわらかい食品である。

これら以外には、以下の課題が考えられる。

1. テルモスの容量が少ない。みんな 500ml 以下の物を持参していたが、総体的に水不足で、脱水気味であった。これが、テント内で紅茶コーヒー類を多く飲む傾向をもたらした。やはり 750ml 以上は必要と思われる。特にヒマラヤのような高地では、1日 40以上の水が必要と言われており、そのうち 20は食事から摂るとして、20以上の水を飲む必要がある。そのことを考えると、500ml では小さい。
2. テント生活を豊かにするためにも、紅茶、コーヒー、緑茶を共同食料として準備しておく必要がある。特に緑茶が良いと思われる。
3. 食料を計画するに当たり、考えなくてはならない項目は食べやすさ、満腹感、カロリー、重量、体積、味覚、価格などあり複雑である。しかも満腹感やカロリーと重量、体積は相反する関係にあり、そのパーティのボッカ力を判断しながら、決めなければならない。

総体的に OB になると、食事の量は減る傾向にあり、そのためカロリーの摂取量も少なめになるのは否めない。よって、行動力も減少傾向にあり、食料としてはそう多くなくて

もいいから、少々値段が高くておいしいものを食べたいということになる。

また社会人になって数十年経っているので、多少グルメ化しており、個人の嗜好がばらばら、頑固で一度合宿前に試食会を行い、みんなで納得する献立を決める必要がある。

◆食料係反省（現役パーティ）----- 現役食糧係 佐藤大介（大学院2年）

食料係はもともと2年生の小須田の担当であったが、彼が合宿に来られなくなってしまったため、11月下旬に食料係を引き継いだ。これ以降、OBの食料計画を青嶋さん、現役の食料計画を私がそれぞれ分担した。

引き継いだ時に小須田の考えた食料計画を受け取り、それに私が若干の変更を加えて、最終的に立てた食料計画は以下のようになった。なお、3日分を一単位とし、4日目には始めに戻るようになっている。

食料計画一覧

	朝 食			昼 食			夕 食		
	品名	数量	Kcal/人	品名	数量	Kcal/人	品名	数量	Kcal/人
I	棒ラーメン	1.5袋	72.0	紅茶	3.0袋	10.0	ペミカン	1.0袋	3200.0
	ソーセージ	3.0個	400.0	砂糖	60g	77.0	カレールー	1.0袋	300.0
	コンソメスープ	3.0袋		詰め合わせ	600g	800.0	無洗米	480g	600.0
	切り餅	3.0個	115.0	甘納豆	3.0袋	47.0	コンソメスープ	1個	
	計		587.0	計		934.0	計		4100.0
II	スパゲティ	1束	378.0	紅茶	3.0袋	10.0	ペミカン	1.0袋	3200.0
	コーンスープ	6.0枚	33.8	砂糖	60g	77.0	クリームシチュー	100.0	110.0
				詰め合わせ	600g	800.0	無洗米	480g	600.0
				チョコレート	30.0g	56.5	チーズ	3個	
	計		411.8	計		943.5	計		3910.0
III	春雨	3.0個	114.0	紅茶	3.0袋	10.0	ペミカン	1.0袋	3200.0
	マーボー春雨	3.0個	464.0	砂糖	60g	77.0	豚汁のもと	3.0袋	61.0
				詰め合わせ	600g	800.0	無洗米	480g	600.0
				甘納豆	3.0袋	47.0			
	計		578.0	計		934.0	計		3861.0

計画はおおむね好評で、カロリー不足に陥ることはなかったと言っていいだろう。夕食の後

は、ほぼ毎日コーンスープやみそ汁などを飲んでしたが、良い水分補給になった。また、ペミカンで油っぽくなった鍋を洗浄できるという利点もある。

しかし毎日ペミカンとなると、やはり味のベースが決まってしまうため、後半になるにつれ飽きが来た。何日かはペミカン以外の食事を用意したい。(小須田案はそうになっていたのだが、食料の準備を始めたのが直前であることなどから割愛してしまった。何事も準備は早めにするようにしたい。)

今後の課題は、朝食にあると考えている。短時間で用意でき、満腹感の得やすいものと考えたい。特に春雨は量の点で不満が残った。(入山日の朝、富山駅で牛丼を食べたのだが、これだけで一日行動できた。これほどではなくとも、ある程度行動できる朝食の量が必要である。)

◆医療係反省 -----佐藤大介 (大学院 2 年)

○ 今合宿において、私は医療係を担当した。準備会で冬山医療について研究発表を行い、先発隊、後発隊のそれぞれが持つ医療箱の中身のチェックを行った。研究発表で作ったテキストは A4 サイズであったが、B5 程度の大きさにして合宿に携帯しやすい形で作れば良かったと考えている。医療箱の中身については、以下の表のものを持って行った。

○携行医薬品一覧

(A) 内服薬	(B) 外用薬	(C) 医療器具	
解熱鎮痛剤	消毒薬	ガーゼ	保温シート
鎮痙剤	軟膏	三角巾	絆創膏
咳止め		包帯	体温計
下痢止め		ネット包帯	ピンセット
抗生剤		テーピングテー プ	はさみ
総合感冒薬		ウェットティッ シュ	冷湿布

○これらのものがあれば、冬山での応急処置を考えた場合に必要十分であると言えるだろう。内服薬の抗生物質など、医師の処方が必要な薬剤を三田哲司先生にお願いし、処方して頂きました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

○医療係として反省すべきは、私が体温計を忘れてしまったことである。パッキングをする際に箱のままではやりにくかったため、スタッフバッグに移したのだが、このときに体温計を入れることを忘れていた。寺司が体調不良になったときにそれが発覚したが、OB の医療箱を借りて対

処した。自分たちだけで合宿に来ていたら、体温を計ることができなかった。準備は余裕を持って何度もチェックするようにしたい。

○寺司が体調を崩したのは、一回目のアタックの日の夜で、症状は吐き気および寒気がするというものだった。また、食欲もなく食事もできないとのことだった。体温は平熱だったので、疲労によるものと考え、念のために総合感冒薬のPL 顆粒を吞ませ安静にするよう指示した。次の日の朝には問題なく行動できるまでに回復し、後遺症もないとのことであった。

■ 厳冬期劔岳登山の印象

以下は、今回の登山に参加したメンバーによる厳冬期劔岳登山の印象・感想である。

◆すばらしい一週間：冬の早月尾根を登って----- 青嶋憲一郎（39年工）

冬の早月尾根を登らせてもらいました。白と黒のシャープな風景を満喫して来ました。

2009年冬の早月尾根は、九大山岳会が第1陣で、ラッセルも他チームのテントも無く、まさに処女雪を蹴立てての登山でした。その分体力の消耗も激しくきつい登山でしたが、休憩時に見る北方稜線の山並の美しさや、池ノ谷の岩壁群の黒に対する、大日尾根の純白な山肌などすばらしい景観を楽しむことができました。

中溝さんから、ヒマラヤのトレーニングの一環としてこの計画が提案されたとき、即座に参加を表明しました。ですが、日が経つにつれて何かとんでもないことに取り組んでいるような気がして、本当に登れるのかしらと不安になりました。しかし、案ずるより生むが易しの喩えどおり、楽しい日々の連続でした。

特に大ベテランの中溝氏、実力抜群の米澤氏に引っ張られての登山ですから、私は何も心配する必要はありません。ただただ一生懸命登・下降をしていればよかったです、その気楽さもあったのでしょう、雪山登山で初めて体重が減りませんでした。

44年ぶりの日本の雪山登山は、確実に私の人生の1ページを飾ってくれました。小窓尾根マツチ箱状ピークの峻厳な姿や、天壤無窮を体現して聳える劔岳の姿が、目を閉じれば今でも目の辺りに浮かびます。楽しい楽しい1週間でした。

◆ 冬山雑感 ----- 米澤 弘夫（39年理）

今回の冬山計画が発表されたとき、反射的に参加を申し込んだ。その理由がなぜだかよく分からない。私はヒマラヤ登山に参加する訳ではなかったから、登山目的の大半と無関係とも言えた。ただ、もう一度、冬の劔に行きたかったのだろう。山岳部最強と謳われた中溝兄、ボッカ力から駄馬・駄牛コンビと揶揄された、青島君と私。まだまだという思いは強いものの、全員すで

に 60 代半ば、体力は 20 代の半分とも言われ、どの程度登れるか、大きな不安があった。しかし、入山してみると三人とも思ったよりも体力が残っていたし、技術的な面は全く問題を感じなかった。積み重ねた経験と日頃の節制が効いたのだろう。

また、長いブランクがあったにもかかわらず、全員すんなりと冬山の生活に入って行けた気がする。各自が手早く自分の分担を果たし、チームとして完成度が高いと言って良い。残念ながら山頂には立てなかったが、中溝リーダーのいささかも衰えぬ重厚な存在感、巧みな雪上技術、適切な判断力はさすがである。また、現役時代と変わらぬ青島君の馬力にも感心した。このパーティでもう一度冬山に入りたい気がする。

一方、現役には技術、基礎体力の面で物足りない所を感じた。経験不足は仕方ないとしても、もう少しスピーディに行動しなければならない。各場面で、どうすれば手際よく短時間で作業を終えることが出来るか、常に考えている必要がある。漫然と山に登っているのは、いつまで経ってもスピーディな行動が可能にはならないだろう。また、日頃の走り込み、筋力トレーニングが足りないのではないかと思う。前日のボッカによる疲労が抜けていなかった点は考慮すべきであるが、60 代よりも前にバテるのではだらしなしいと言われても反論出来まい。また、同行することもあるが、その時は、ロートルとの違いを見せて欲しいものだ。

冬の美しい剣を眺めながら純白の雪面をラッセルする・・・最近にない素晴らしい経験だった。久しぶりで、心を掻き立てる山行をさせてくれた、中溝、青島両兄、並びにロートルに付き合ってくれた現役の諸君に心より感謝する。

◆ 早月尾根で感じたこと ----- 中溝幸夫(36年 文)

九大山岳会でヒマラヤの 6000~7000 メートル峰を登るという計画が持ち上がったとき、私は即座に、はたしてこの年齢で登れるのだろうか---- ??? と訝しんだ。この問題は、いくら考えても答えは出ない。じっさいに登ってみるしかないのだ。しかし、ヒマラヤに何度も出かけることはできないので、ヒマラヤの条件にもっとも近い冬の北アルプスに登ってみればよい。それが、今回の厳冬期剣岳早月尾根登山計画を考えた理由である。

幸いにして、米澤、青嶋、金氏の 3 氏が同行しようと言ってくれた。米澤くんは、いわずと知れた九大山岳部始まって以来の“卓越したクライマー”としてその存在は名高い。彼が書いた「屋久島の白い壁」は、屋久島のクライミング史に残る名著である。また、青嶋くんと金氏くんは、一昨年、南米の最高峰、アコンカグア (6962 メートル) の登山にトライした、チャレンジ精神旺盛なシニアの山岳会員である。私は、彼らもまた私と同じ疑問をもち、その答えを求めするためにこの計画に参加したのだ、と確信していた。(後で知ったが、米澤くんの参加理由はそうではなかった。彼の「冬山雑感」を読めばわかる。また金氏くんは、残念にも、12 月になってある事情から参加できなくなった。)

私には2つの心配があった。一つは体力であり、もう一つは冬山感覚である。しかし、一方では“誇り”もあった。果たして冬山のボッカに耐えられるだろうか、厳しい気象条件に対応できる冬山感覚や雪と岩の急傾斜に対応できるバランス感覚がまだ残っているだろうか -----。この種の心配は、あとからあとから沸いて出た。しかし、九大山岳部員として冬の北アルプスに何度も登った経験に裏打ちされた誇りもあった。(もっとも、それらの経験は40年も昔のことだったので、誇りといっても、その根拠はきわめて薄弱だったのだが-----。)そして、8月に入ってから私は心配を払拭するために、冬山のためのトレーニングを本格的に開始した。(トレーニングのプロセスについては、「エピソードいろいろ—冬山トレーニングとぎっくり腰」を参照してほしい。)

そして、12月27日「本番」を迎えた。予想もしない好天に恵まれ、われわれは早月尾根2200メートルのACから尾根上部のルートワークと頂上アタックを開始した。OB3名と現役部員3名が協力しあってラッセルする。この冬、まだ誰も足を踏み入れていない新雪に覆われた早月尾根。われわれは、今、そこを頂上目指して登っている！--- 私は、気分的にも身体的にも、すでに現役の頃の“感覚”を取り戻していた。輝く新雪、紺碧の空、劔岳西面の鎧のような池ノ谷の障壁群。劔の頂稜から、急角度に落ち込んでくる劔尾根、ドームと2峰南壁の圧倒的な垂壁。ハイコントラストな池ノ谷特有のこの風景を、いつ憧れを持って眺めただろうか。そして、いつかはあの壁を攀じ登ってみたい-----、いつか僕もあの垂壁にアイスハンマーをふるってみたい、-----そこにはすでに20代のときの“僕”がいた。山に行く前、私がつけていた二つの心配は杞憂にすぎなかった。おそらく米澤くんも青嶋くんも私と同じ気持ちだっただろう。私たちOB3名は、あまり調子のよくない現役とは対照的に、快調に早月尾根を登っていった。

残念ながら、劔岳の登頂はならなかった。しかし、頂上に上るのは単なる形式であって、この山登りの目的はほぼ完全に果たしたと思った。なによりも米澤くん、青嶋くんとのパートナーシップはかつての山岳部時代のそれを彷彿とさせるほど完璧に近かったし、彼らの登山力たるやほとんど山岳部時代と同じではないか、と感じるほどであった。私のリーダーシップに対するお二人のサポートに心から感謝している。そして、最後に現役諸君、自らの登山力をしっかり認識して、これから大いにはばたいてほしい。

◆冬合宿の感想と反省----- 寺司周平 (理3年)

今回の合宿は、初めての本格的な冬山で、新鮮な感動が満載であった。ワカンの想像以上の威力に驚き、ラッセルで想像以上に体力を使うのに苦勞した。ここで万が一足を引っかけたら大変なことになる、というアイゼンをつけて3年目にして初めての恐怖は、今思い返せば感動さえ頭によぎる。感動の反面、ワカンとアイゼンについては反省点も多い。ワカンはバンドの固定の仕

方を間違っていて覚えていたため、つけ始めて1時間くらいは何度も外れて隊に迷惑をかけた。ラッセルでは自分の体力不足が身にしみた。寒さに震える中、ギア操作がスムーズに行えずOB先輩に任せっきりであった。

自分が今どの辺りのレベルにいるのかははっきりしたことが、今合宿の大きな成果であった。合宿で感じた己の未熟さの自覚、そして感動が、今後の強いモチベーションとなって、次の山行にぜひ生かしたいと思っている。

【現役パーティリーダー (PL)・気象担当として】 今合宿で自分がその任を満足に果たすことが出来たか、その答えは明らかに“否”である。隊の時間管理と行動予定そのどちらも、佐藤先輩に頼りきりであった(実際、行動記録もPL寺司が疎かにしていたところ、佐藤先輩がとってくださっていた)。ただ1・2年生の頃のように総じて余裕が無かった訳ではなく、満足にはないかもしれないが、先を読みつつの行動が出来たのではないかと思う。

気象担当としては全く何も出来なかった。実際に天気図を描いたのは、一日目は甲斐で残りは全部佐藤先輩である。天気図を描くのもままならないのに気象担当として入山した自分を恥じる。(という反省をもとに、下山後只今気象の勉強の真最中です。今年度中に、山に必要なはありませんが、気象予報士の資格をとるつもりである。

◆冬山合宿の感想 ----- 佐藤大介 (大学院2年)

冬山合宿として剣岳に登る、その計画を初めて聞いたのが10月であった。無理だろう、というのが私の印象だった。冬山経験の余りない現役では、OBの足手まといになるだけである、と考えた。(残念ながらそれは正しかったようだ。)それでも行きたい、との現役チーフリーダー・寺司の熱意に負け、それならばトレーニングをしっかりと条件を付けて、とりあえず許可することにした。私は当初合宿には参加するつもりではなかったのだが、(修士論文が完成するかどうか怪しかったためである。)大学生、山岳部の最後の(個人的な)締めとして、なによりこのチャンスを逃したら冬の剣には一生登れないだろうと考え直し、10月下旬参加することを寺司に伝えた。

それからは部として、または個人的にトレーニングを再開したのだが、なにしろ久しぶりの冬山なので勘と体力を取り戻すのにけっこう苦労した。現役の参加人数を正式決定するまでにもかなりの紆余曲折を経て、一時は合宿が危うくなるかと思っただが、寺司がうまく立ち回ってくれてなんとか合宿までこぎ着けた。数回の準備会を経て、合宿本番はあつという間にやってきた。

我々の入山の日、先発隊のOBが登頂する予定になっていた。天気もいいし登頂できたら、と軽く考えて馬場島へ入ったが、そこで警備隊の方から聞かされたのは、OBはラッセルで苦労して殆ど進めていないということだった。今更ながら剣の厳しさを思い知った。それからはOB

に追いつこうと早月尾根を登り、2日後に2200メートルACにて合流した。その次の日も快晴で、登頂目指して出発したが、胸までのラッセルがきつくて2600mピークの時点で既に私は消耗してしまっていた。2800mのシシ頭付近までなんとかついていくものの、そこで動けなくなってしまい中溝リーダーにそのことを申し出た。リーダーからはここで待機するようにとの指示をもらい、私以外のパーティで登頂を目指すことになった。結局、その日は登頂できず、2日後に再び登頂を目指したが、今度は先行パーティの多さに時間切れとなり、登頂を断念した。

登頂はできなかったものの、冬山でこれほどの快晴となったのは初めての経験であり、また来たいと思うほどであった。それだけに自分の体力不足が悔やまれることとなった。小窓尾根や富山湾を山頂から見るべく、次の機会に備えたい。まずは毎日のトレーニングをこれまで以上に厳しくすること（修論を書かなければいけないと言い訳してトレーニングを甘くしていた。）、迅速な行動を身につけるために時間を意識した練習を行いたい。特に生活技術における時間の短縮はザイルも使わず最も簡単にできるものなので、日常生活から意識して迅速な行動を心がけたいと思う。

今回で学生としての山岳部は一区切りとなるが、自分の実力不足を自覚してしまったので、このまま登山を辞めることはせず、さらに上を目指したいと思います。

◆ 剣岳早月尾根登山の感想 ----- 甲斐誠二 (山岳部2年部員)

ひとまず無事に帰ってこれてほっとしています。冬の剣ということを楽しみではありましたが、最初は正直かなり不安でした。しかし、中溝先生の綿密な計画に沿って準備していったので、すごく心強かったです。

自分は係としては遭難対策の担当になりました。自分でいろいろ調べていくことは大変でしたが危険箇所についてしっかり頭に入れておくことができたのでよかったです。

いざ早月尾根に行くと、2200メートルの早月小屋まででさえかなりきつかったです。1日目は1350メートルあたりまでしか行けませんでした。歩荷の訓練もしていたのですが、想像以上に体力が奪われました。やっとのことで早月小屋についてOBの方々からいただいた紅茶の美味しさが今でも忘れられません。次の日は天候に恵まれたためアタックしましたが、僕たちが足手まといのようになってしまい、自らの力不足を痛感しました。下りはもう足がふらふらになってついて行くのもやっとなかったです。そして翌日にラッセル訓練を行い、29日にリベンジしましたが、結局山頂を踏むことができませんでした。しかし、安全な下り方など多くのことを教えていただき大変参考になりました。

今回OBの山行について行って本当に良かったと思っています。山頂にはいけませんでした。本当にいろいろなことを教えていただき、今後に生かしていきたいと思いました。それに本当に楽しかったです。それと、体力不足についても今後なんとかしていきたいと思います。

■エピソードいろいろ----- 中溝 幸夫 (36年文)

(1) 冬山トレーニングとぎっくり腰

われわれシニアが厳冬期の剣岳に登ることができる決め手は、トレーニングだと私は考えていた。ときどきは山登りをしてきたものの、ボッカした山登りではないので、そんなもので冬の剣岳とはおこがましいというものだ！体力的には、持久力というよりもむしろ「ボッカ力」がなくなっているのに、ボッカのトレーニングをしなければならない。それは自分の身体そのものが、ボッカしている状態にじゅうぶん慣れるということだ。当然のことである。ということで、私は、自宅近郊の新立山（標高 325 メートル、別名は権現山）をトレーニングの場所を選んだ。登山口から登って降りてくると約 1 時間の行程だ。（新立山は、宗像市と鞍手郡宮若町との境にある小さな山である。頂上から宮若町のトヨタの大工場がよく見え、北西側は玄界灘の眺望もよい。）

8 月に入ってから週に平均 3 日、新立山に登った（8 月 12 回）。9 月は 10 回。9 月末からステップバイステップ方式で、ボッカを増やしていった。最初は、5 キロ。次いで 10 キロ。10 キロからは重量を小刻みに増やすために、ダンベルで使っていた錘りを利用した。2 キロ 2 個、2.5 キロ 2 個を持っていたので、それらを適当に組み合わせボッカの重量の増加を調節した。重量の増加は、いっきに増やすのではなく、同じ重量を 1 週間から 2 週間続けて担ぎ、その次の週に 4 - 5 キロ増やすというやり方を採用した。10 月になって、10 回目の登山のとき、重量は 20 キロに増えていた。この分でいくと、12 月の冬山前には 30 キロ程度にまで増加できるかもしれない。

この期待は、11 月になって突発した「ぎっくり腰」で消し飛んでしまった。消し飛んだだけではなく、腰に激痛が走ったとき、冬山そのものが吹っ飛んだ、と確信した。「あっ、これで今回の冬山は終わった。」11 月に入ってまもなく、ある晩、車を運転していて運転席で腰を少し持ち上げたとき腰と尻の中間部位に“激痛”が走った。原因は、ボッカ練習だ、それ以外には考えられない。私は、車の運転席で微妙に腰を浮かした状態で、騙し騙ししながらなんとか自宅まで運転して帰り、自宅の駐車スペースでは運転席から右側のドアを開けて、車外に転がり出て、そのまま這って自宅のドアまで行き、文字通り玄関ドアから中にころがりこんだ。腰の微妙な位置で起こる激痛は治まらず、その日はそのまま眠った。このとき、マジで今回の冬山計画はボツだと思った。私が言い出しっぺだし、どうしよう、みんなにどう説明したらよいだろうか？そんなことを悶々と考えつつ、痛みが減るのをじっと我慢して 10 日間が経過した。

そして、痛みがほぼ完全になくなった 11 月中旬、私はボッカ登山を再開した。最初にもどってまた 5 キロから始めたのだ。幸いなことに 11 月末には 20 キロにカムバックしていた。それと同時にトレーニングのメニューも増加した。スクワット 250 回/日、かかと上下 30 回、腹筋と背筋 30 回、ランニング 20 分、スイミング 30 分である。これを毎日、全部やったわけではなく、1 日のうち 1 つでも、2 つでもやれることをやるという考えだった。（実際のところ、半月でこの

メニューは挫折した。最後まで残ったのは、ボッカ登山とスイミングだけだった。）

12月12日（土）は、今回の冬山に参加するメンバー全員の宝満山ボッカ練習の日だった。私は、ぎっくり腰になってから初めて25キロを担いで宝満山に登った。腰の痛みはほとんど消えていた。ほんとに“かろうじて”宝満の山頂に達することができた。（このボッカ練習のとき、Yは30キロ、Aは36キロをボッカした。Aは、途中、ダウンして20キロ程度に減量して山頂まで登った。後日、彼は30キロをボッカして若杉山に再チャレンジして、成功したそうだ。）

私が思うに、今回の冬山でOBの体力が現役のそれを凌駕しているように見えたのは、このようなボッカ・トレーニングがあったからだと思う。つまり、平素のトレーニングこそ冬山に登る力量の源なのだ！（12月30日、剣から下山して、富山の銭湯で体重を測ったら山に入る前の体重から4.5キロ、減量していた。これが何を意味するかは、食料系の報告を読みながら、もう少し考える時間が必要である。）

(2) 「のぞみ6号」がいなくなった

12月22日、冬山出発の日。博多駅新幹線13番ホームでの出来事。朝6時45分。通常ならば、かなり早い時間帯だ。3名のOB（N, Y, A）は自分たちの乗る“7:00発 のぞみ6号”をホームで待っていた。ホームに、のぞみ号が滑り込んできた。3名は、何の疑問も抱かずに、重たいザックを車内に担ぎ込んだ。Nは、冬山用登山靴と切符、現金などが入ったサブザックを網棚に載せた。そのとき、Yは「発車までまだ10分程度、ありますね。朝食を買っておいたほうが良いですよ。売店も開いてましたからね。自分は朝食を用意してきました。」と言った。そのコトバに反応して、Nはすぐに車内からホームに降り、階下の売店に向かった。売店では「海苔巻きといなり」の弁当とお茶を買い、ついでにトイレにも寄って腕時計を見ながら、まだじゅうぶん間に合うな-----と思いつつ、ホームに上がった。目の前にいる筈の、「のぞみ」がホームから消えていた。発車してしまったのだ！！

最初、Nには何が起こったのか、皆目、理解できなかった。まさに「あっけにとられた」瞬間だった。のぞみは、どこに行ってしまったのか？ ついで、Nはホーム番号の間違いだろうと考え、慌てて階段を下りて別のホームに行こうとした。そのとき、「のぞみ6号」がすーっとこのホームに滑り込んできたのだ。Nは慌ててポケットから切符を取り出し、自分の切符が間違いなく7時00分発、のぞみ6号であることを確かめ、目の前の列車がそののぞみ6号であることも確かめた。それが確かにのぞみ6号であることがわかったとき、AとYとザック3個、網棚のサブザックが別ののぞみ号に乗って、北に向かってしまったことを完全に理解した。この時間帯、のぞみ号は10分間隔で2本あったのだ！（実際は、6時50分発のぞみ116号と7時発のぞみ6号）

さて、途方にくれたNは、「もし自分が網棚に載せたサブザックが東京駅まで行ってしまった

なら、今回の冬山はボツになってしまう。」と思った。その中には、冬山用の靴が入っていたからだ。どうしてもそれを回収しなければならない。Nは、のぞみ6号の車掌に会いにいった。

「友人が間違えて前ののぞみに乗ってしまったので、電話で話したい、どうしたらよいでしょうか？」

「新幹線には、それぞれの列車間に通じる電話はありません。」

「????」

「でも、中央制御室を通して車掌が話すことはできます。それを使って連絡してあげましょう。」

「では、のぞみ116号の7号車1, 2番座席にいる青嶋憲一郎、米澤弘夫のどちらかに、広島で下車して、のぞみ6号を待つように連絡してください。その際、くれぐれも網棚の黒いサブザックを忘れないように連絡してください。」

「はい、承知しました。間違いなく連絡いたします。」

その後、数分して車掌が7号車の私のところに来て、「友人の方は新大阪駅まで行ってもらうことにしました。この時間帯ののぞみは座席が空いていて、おそらく友人の方も座って新大阪までは行けるでしょうから。新大阪駅で待っていてもらえば、問題ありません。あなた方の切符は、新大阪駅乗換えですからね。」ということであった。私は、安堵した。これで問題解決だ。冬山にも行ける！

数分後に、のぞみ6号は小倉駅新幹線のホームに滑りこんだ。私は、窓から通過していくホームの風景をじっと見ていた。-----と、そこにAとYの笑った顔があった。

(3) 報道陣で賑わう伊折ゲート

報道陣：「たいへん失礼ですけど、あなた方、九大のパーティは平均年齢65歳ですよ。それで冬の剣岳に登る自信はありますか？」(こいつ、失礼なことを聞く奴だなあ-----)

私：「平均年齢は、最年長者が73歳で、一番若い学生が19歳ですから、平均46歳になります。もちろん剣岳に登るつもりできました。」(73歳というのは、渡邊文明さんで、19歳は現役2年生の甲斐くんのことを指す。)

報道陣：「今回の目的は、何でしょうか？」

私：「2つあります。一つは来年度行くヒマラヤのトレーニングです。もう一つは、学生の山岳部員に剣の風と雪の怖さを経験してもらうことです。」

報道陣：「失礼ですが、(何度も言うな!) この前、剣に登られたのは何年前ですか？」

私：「40年前です。」

われわれ九大パーティが伊折ゲートに到着したとき、15名ほどの報道陣がわれわれの到着を待ち構えていた。こんなことは初めての経験だ。12月中旬に富山県警山岳警備隊から連絡があった。「例年、冬山第一陣には、報道関係者のインタビューがあることになっています。それで、県警としては第一陣のパーティにそのことの詳細をしておこうと思ひまして-----」「ハイ、了解しました。」ということで、その結果がこの報道陣の質問だったのだ。それでも、報道陣の多さにはひじょうに驚いた。車でわれわれをゲートまで送ってきていただいた友野先輩も驚かれたことと思う。(友野先輩、送っていただいてありがとうございます。)

(4) 富山県山岳警備隊とのラッセルの駆け引き

「山岳警備隊をあてにしないでください。」「私たちは、冬山第一陣として入山された九大さんのためにルートを確保しようとはまったく思ってもいませんので。」「私たちは、登山者のためにラッセルすることなど、考えてもおりません。」富山県山岳警備隊リーダーのことばである。考えてみれば無理もない。彼らは仕事で冬山に登っているのだ。無謀な登山者が遭難したら、身を賭してその救助に駆けつけるのだ。そんな登山者のために、ラッセルなんぞ、してやる気持ちはさらさらない。----- われわれも、彼らの気持ちはわかる。

しかし、われわれが現実、シニアの状態(平均年齢65歳)からエネルギー満ち溢れた若者に戻ることも絶対に不可能な話だ。できることなら、ラッセルしてあるルートを歩きたい。これが本音というものだ。ということで、われわれは、山岳警備隊がいつ2200メートルの早月小屋に入る予定なのかをしきりに聞きだそうとした。これが22日のことである。われわれの隊は、23日または24日に2200メートルまで登る計画だった。警備隊もさるもの、「登るのは24日の予定」と言っておきながら、実際には24日は沈殿した(その理由は不明だが)。どうやら彼らもわれわれがいつ早月小屋まで登るのかを気にしていたらしい。だから23日に松尾平からもどってきたとき、「今日はどこまでいられましたか?」とか「ラッセルはどうでしたか?」としきりに聞いたのだ。

25日、われわれがBCを撤収して、1300メートル付近に登っているとき、警備隊パーティがわれわれに追いついてきた。すれ違うとき、「どこまでラッセルがありますか?」と尋ねられて、われわれが「1330メートルまでです。」と答えると、「じゃあ、ひっかえしましょうか?」とかなんとなく言ったように思った。おそらく冗談だろう。しかし、本音は彼らもわれわれのラッセルを当てにしていたふしがある。「落ち葉マークを背中と胸に張って登りたいね。」とは一人のOBの言。このように今回の劔岳早月尾根では、ラッセルを巡って、山岳警備隊を九大隊との微妙な駆け引きがあったのだ。

この結末をお話ししておきたい。九大隊は馬場島760メートルから1330メートルの間(高度差570メートル)をラッセルし、警備隊は1330メートルから2200メートルの間(高度差870

メートル)をラッセルした。警備隊に感謝！しかし、2200メートルから2850メートルの間(高度差650メートル)は、九大隊はがんばったのだ。九大隊のラッセルの高度差は、合計1220メートルになった。もっとも2200メートルから上部は、シニアメンバーだけではなく、現役諸君の力も借りたのだが -----。

(5)OBの底力を見よ！

「山側を向くな！ 谷側を見ながら下れ！」OBの大声が現役に飛ぶ。厳冬期劔岳早月尾根エボシ岩の下り急斜面での一コマだ。現役は雪山経験に乏しい。したがって、雪と岩のミックスした急斜面をクライムダウンするのは、かなりの恐怖感である。どうしても山側を向いて、尻っぴり腰の体勢になってしまう。身体が山側にへばりつくような体勢をとってしまうのだ。一方、OBの面々は、劔岳をはじめ、穂高や槍、厳冬期北アルプス登山経験は豊富。とりわけ米澤くんは、積雪期岩壁登攀に豊富なキャリアーをもっている。問題は、OBの経験が30年も40年も昔の出来事だという点である。果たしてそんな昔の経験に基づくバランス感覚が身体に残っているのだろうか？

しかし、ちゃんと残っていたのだ！OBの面々は急斜面でも身体を垂直に保ち、谷側を向いて、安定した体勢で下りていくことができた。もちろん山側を向いても、その安定度はほとんど変わらない。急斜面を降りながら、現役諸君に「どうすればこのような急斜面で、身体を安定させて、かつ安全に下降できるのか」を現物提示しながら、解説しながら降りる。それは、現役諸君にとってはかなりの驚きだったにちがいない。

齢をとると、バランス感覚が急速に落ちるとよく言われている。しかし、今回の劔岳早月尾根を登った3名のOBは、いずれも落ちていなかった。これぞOBの底力でなくて、なんであろう。